慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	福沢諭吉関係新資料紹介
Sub Title	New materials : letters from Fukuzawa Yukichi
Author	福沢研究センター(Fukuzawa Memorial Center) 西澤, 直子(Nishizawa, Naoko)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2012
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). Vol.29, (2012.) ,p.383- 394
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20120000-0383

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

福沢諭吉関係新資料紹介

福沢研究センター

凡例

一、常用漢字は、原則として現在使用されている字体を用いたが、慶應義塾など若干の固有名詞に、原文の字体を残した。

二、異体字、俗字、或いは書き誤りと思われる文字は、正体に直した。

三、仮名づかいは、原則として原文のままとした。ただし、ひら仮名・かた仮名の判別がつかない文字は、かた仮名字体で表記した。

四、変体仮名はひら仮名に改めた。ただし、書簡において助詞として用いられている「は」「て」「え」は、原文の字形を残し、小活字右寄せで「ゟ」「而」「ニ」のように印刷した。原文が確認できない書簡の場合も、漢字の字体で表記されている「者」「而」「江」が助詞として使われている場合には、右の字体を用いた。

五、濁点・半濁点は原文のままとした。
六、合字は、使用頻度の高いゟ（より）、〆（しめ）は原文の字形を残した。頻度の低いヿはトキ、ㇰはトモ、コはことと表記した。
七、句読点は、編者の判断により適宜これを補った。
八、執筆年月日や発信年月日などを推定でしか示すことができないものには、「カ」を付した。
九、脱落と思われる文字は、〔　〕を付して補った。
十、書簡は、本文の後に【　】を付して書簡の大意を示した。また封筒に関する事項は、書簡の理解に必要と判断されるもののみに限った。

Ⅰ　福沢諭吉書簡

『福沢諭吉書簡集』（岩波書店　平成十三～十五年　以下『書簡集』と略す）未掲載で、『近代日本研究』第二十八巻刊行以降見出された書簡を載録する。掲載は発信年月日順とし、体裁はすべて『書簡集』の形式に従った。詳しくは『書簡集』第一巻所収の凡例を参照されたい。なお、書簡番号は『書簡集』から『近代日本研究』第二十八巻まで通番で付された番号を追うものである。

二六一　中島永元宛　明治十二（一八七八）年十月十日付

秋冷益御清安被成御座奉拝賀。陳ハ此程桐野弘方相伺候得ム、三重学校設立ニ付、可然人物御入用之由ニ而、既ニ当塾ニも其話を以て志願之者有之候得共、全体其校之仕組を承知不致而ハ、人品之適否もさし定難く、試ニ爰ニ壹名あり、即チ、酒井良明と申す者に而、随分英書もよく読、翻訳等も出来可申、漢書之方ハ元ト儒生ニあらされハ、深き嗜ハ無之候得共、当今之学校用ニも間ニ合可申、若しも此者に而可然地位ならバ、御採用御周旋奉願度、尤月給も多きを望まず、四十円カ五十円ニ而満足可仕。執行中之負債も有之、旁以金を要する身分ニ付、給ハ低くも寧ロ早く地位ニ就き度志願ニ御座候。御用繁之御中、恐縮ニ不堪候得共、御都合も宜敷候ハヽ、一応御逢被下度奉願候。尚い才ハ本人方可申上、御聞取奉願候。早々頓首。

十月十日　　福沢諭吉

中島先生　梧下

尚以、桐野弘義も誠ニ御約介罷成、以御蔭此度之長崎行、本人おゐて難有存居候次第。尚、小生かも宜布御礼申上呉候様申聞候。以上。

【三重学校の教師として酒井良明を推薦する】

［封筒表］西久保城山町四番　中島永元様　福沢諭吉　酒井良明持参　［封筒裏］封

○名宛人の「中島先生」は中島永元。天保十五（一八四四）年生まれ。佐賀藩出身で、致遠館教官や大阪洋学校校長を経て、明治二（一八六九）年大学中助教兼大寮長。四年には文部省七等出仕として岩倉使節団に随行し、欧米各国を歴訪した。帰国後文部省大書記官、第三高等中学校初代校長を経て、元老院議官、貴族院議員も務める。大正十一（一九二二）年歿。『佐賀県歴史人名事典』（洋学堂書店、一九九三年）。○桐野弘は鹿児島藩出身で、明治五年十月から慶應義塾に学ぶ。十一年から務めていた青森県師範学校幹事を辞めた後、福沢が中島に推薦して、長崎中学校の教員となった。○「三重学校」は三重県津中学校。○酒井良明は嘉永五（一八五二）年生まれ。福井藩出身で、明治五年に上京し、七年十一月慶應義塾に入る。九年卒業後、福沢宅に住み込み、旧福井藩主の長男が慶應義塾に入学すると、その教育係を務めた。十三年にこの書簡で推挙されている三重県津中学校の教員となり、校長も務めるが、十五年には退職し、翌年から慶應義塾の教員となった。幼稚舎でも教え、幼稚舎課程修了者のうち希望者二〇名ほどを私邸に引き受け、寝食はじめ生活全般の世話と指導をした。これは酒井寄宿舎と呼ばれ、義塾が大規模な寄宿舎を建設する明治三三年まで続いた。教員以外では品川毛織会社取締役や三井呉服店監査役なども務めた。昭和五（一九三〇）年歿。○書簡の発信年は、桐野弘を長崎中学校教員に推薦したのが十二年七月で、十三年の交詢社の名簿で同人は長崎中学校教員とあることや、酒井の三重赴任が十三年であることから、十二年と推測される。○山本晶「酒井良明を紹介する―中島永元あて福沢諭吉書簡―」（『福沢手帖』第一四九号、二〇一一年六月）参照。

二六三　竹添進一郎宛

明治十七（一八八四）年七月一日付

昨日ハ拝趨、御休息中長坐恐縮ニ不堪、様々御話相伺難有奉存候。井上も弥再遊と決し、今日ゟ少し用意も仕居。尚出発前ニゟ毎度参上、御差図可奉伺宜敷奉願候。又乍序申上候。名越時孝義拝謁之義、御許容被下難有奉存候。則此書持参参堂仕候間、若し御閑も被為在候ハ、、御逢奉願候。いオハ本人ゟ可申上、御聞取被下、爾後何か御教示奉願候。要用而已申上度、早々如此御座候。頓首。

七月十二日　　諭吉

竹添様　梧下

【井上角五郎が再度朝鮮に渡ることを決め用意を始めたと告げ、出発前には竹添のもとに参上するので「御差図」を与えてくれるように依頼。また名越時孝との面会を求める】

○名宛人の「竹添様」は竹添進一郎。天保十三（一八四二）年天草（熊本県天草郡大矢野町）に生まれ、維新期は熊本藩に仕え、明治八（一八七五）年、修史局御用掛となり、十一年四月以降大蔵省に勤務、十三年清国天津在勤領事となり、在任中に琉球問題につき李鴻章と交渉した。十五年外務大書記官となり、同年十一月、弁理公使として朝鮮へ赴任、在任中の十七年十二月に甲申事変が起り、処理に苦労した。十八年帰国し、同年六月公使を免ぜられた。二十六年外務省を退いた。大正六（一九一七）年歿。○井上角五郎は万延元（一八六〇）年備後国深津郡上村（広島県福山市）に生まれる。号は琢園。福山誠之館や広島県師範学校で学び、明治十二（一八七九）年に上京。福沢家住み込みの漢学家庭教師となり、慶應義塾にも入学、十五年に卒業した。在学中から福沢の紹介で後藤象二郎の秘書役を務め、十五年十二月朝鮮政府顧問となった牛場卓蔵の随員として渡朝、統理交渉通商事務衙門（外衙門）に出仕した。十六年十一月に金允植と協力し、朝鮮初の近代的新聞『漢城旬報』を発刊、続いて初めて漢文・ハングル混合文体を実用化した『漢城周報』の創刊（十九年）に尽力した。明治二十三年からは落選や辞職をはさみながら、大正十三（一九二四）年まで衆議院議員を務め、かたわら北海道炭礦鉄道会社などの経営に参画、日本製鋼所（現新日本製鉄株式会社）を創立し会長に就任した。昭和十三（一九三八）年歿。○名越時孝は水戸出身の士族で福沢邸に住み込み、慶應義塾で漢学を講じるとともに、福沢家の子供たちにも漢学を教えた。自ら

は義塾で英学を学んでいる。のち水戸中学の漢文教師となった。福沢の長男および次男の留学にあたっては、送別の漢詩を贈っている。○発信年は、前述『漢城旬報』に明治十七（一八八四）年二月に掲載した「華兵凶暴」が在朝清国軍から攻撃を受け、井上が帰国を余儀なくされ、再度朝鮮に渡ることを計画した十七年と考えられる。井上角五郎の自記年譜によれば八月に京城に到着した。年末に甲申事変によって再び帰国を余儀なくされるが、十九年末まで日本と朝鮮を行き来している。

二六三　中村道太宛

明治二十年ヵ六月十二日付

過日ハ難有奉存候。一同実ニ歓を尽し、私ニおゐても満足仕候。いよ〳〵今朝十時出発、横浜ゟ井上氏ゟ手紙参居候得共、こゝニ封入不仕、何れ拝顔万々可申上候。扨中津銀行之義、今朝末貞友年（先日来御目ニ掛り候銀行之者）拙宅へ参り、中村先生之方今ニ取極出来不致、甚掛念云々申出候ニ付、左様之気遣ハ万々有之間敷、何れ篤ト承はりて報道可致様、返事致置候。実ハ今度東京ニ而売渡し之義、中津之ものへ知れたる処、同町之金満家共がやきもちを起したる事と見へ、九十四円ならバ中津ニ而引受けんと申出したるよし。就而は山口之一手ハ東京ニ而相談致候ニ付、最早左様之事ハ出来不申とて、力身居る次第ニ付、万々一ニも此方がはづれてハ、金之事ハ兎も角も、山口連の顔が立たぬと申立て引きニ相成候ニ付、甚掛念とて熱心ニ相成候次第。何卒御都合宜敷候ハ、、安心出来候様、御取計奉願候。明朝ハ岡本貞烋母之葬式ニ而寺へ参り、夫れゟ午前十時前時事新報へ参り、午後四時過まで同社ニ居る積ニ御座候。御用も御座候ハ、、同社ゟ被仰聞被下度奉願候。右要用而已申上度。早々頓首。

六月十二日　　諭吉

中村様

【中津銀行関係者が心配しているので、同行への出資を急ぐよう依頼する】

○名宛人の「中村様」は中村道太。天保七（一八三六）年、三河国吉田（愛知県豊橋市）生まれ。江戸詰を命じられて出府中、慶応二（一八六六）年鉄砲洲の塾を訪ね、福沢と最初に面会している。福沢の紹介で早矢仕有的と知り合い、丸屋商社の共同経営者となった。明治九（一八七六）年豊橋に帰り、第八国立銀行を創設、翌年渥美郡長。十二年福沢にうながされ上京、大蔵卿大隈重信の信任を得て、十三年二月横浜正金銀行を設立、初代頭取に就任する。二十一年、中村は東京米商会所の頭取に就任するが、二十四年に米商会所の仲買人身元金および売買証拠金費消問題が起こった際に、私財を投げ出して辞任し、以後は社会の表舞台には立たなかった。その失脚の原因は、改進党系の中村が自由党から求められた政治献金を断ったことから、報復を受けたといわれている。大正十（一九二一）年東京で歿し、郷里に葬られた。○「井上氏」は井上角五郎か。明治二十（一八八七）年六月に、福沢は中村道太と共同出資でアメリカに農地を購入し、移民計画に着手した。井上はその現地責任者として、十五日に渡米している。○「中津銀行」はここでは第七十八国立銀行。明治十一年に、旧中津藩士に給付された金禄公債を原資として三七〇名の株主によって設立されたが、その後株主が減少。二十年にはわずか十一名となり、翌二十一年に東京八王子に移転、中津は支店となった。明治二十二年に誕生した株式会社中津銀行とは別組織。○末貞友年は、旧中津藩士。○「山口」は山口広江。文政七（一八二四）年生まれ。旧中津藩士で下士階級の出身であったが、天保十三（一八四二）年に元締方御勘定人に任命された後、財政改革に成功を収め、慶応四（一八六八）年には上士階級に抜擢された。明治維新後は県大属、小参事を務め、第七十八銀行を設立して頭取を務めていた。○岡本貞烈は嘉永六（一八五三）年生まれ。明治三年小田原藩の公費生として慶應義塾に入った。地方官吏を務めていたが、明治十二年末に福沢から交詢社創設事務の担当を任され、翌年設立後も事務局の中心となった。時事新報社では印刷長を務めた。二十六年に渡米し、帰国後は実業界に転じた。大正三（一九一四）年歿。○発信年は第七十八銀行の譲渡の時期から、明治二十年と推察される。但し、通常中津銀行とよばれるのは、旧中津藩士の互助組織で銀行類似業務も行っていた天保義社の後身である株式会社中津銀行（明治二十二年創立）である。天保義社は十三年ごろから経営をめぐって内部に対立があり組織改革が行われてきたが、二十一年八月に私立銀行条例による銀行への改組が決定した。末貞友年はその改革委員および起草委員に選ばれているので、「中津銀行」が株式会社中津銀行のことであるならば、明治二十一年の可能性もある。しかしながら、東京での譲渡

を考えていることや、それを中津の「金満家」たちが不服に思い、また「山口連の顔が立たぬ」云々から考えて、第七十八銀行のことであろうと判断した。福沢はほかの書簡においても、第七十八銀行を中津銀行と表現している（『書簡集』第九巻索引参照）。○『大分県史』近代篇1（大分県、一九八四年）、『旧中津藩士族死亡弔慰資金要覧』（三木作次郎編纂発行、一九二七年）参照。

三六一四　後藤象二郎宛

明治二十（一八八七）年ヵ九月十七日付

拝啓仕候。陳ハ佐久間山治事、たま〳〵今日出京致し候ニ付、兎ニ角ニ一応御目通致置候方、都合ならんと存候。差出候間、若し御寸暇も被為在候ハ、、暫時間御逢奉願候。尚い才ハ本人へ被仰聞被下度奉存候。要用而已。早々頓首拝。

九月廿七日　　諭吉

後藤先生　侍史

【後藤象二郎に佐久間（のち武藤）山治を紹介し、面会を求める】

○名宛人の「後藤先生」は、後藤象二郎。天保九（一八三八）年高知に生まれる。坂本竜馬と共に藩主山内容堂を説得し、慶応三（一八六七）年将軍徳川慶喜に大政奉還を行わせた。明治政府では要職を歴任、民撰議院設立建白書に名を連ねた。福沢との関係は、明治七（一八七四）年に買収した高島炭鉱が経営難に陥った際、福沢が岩崎弥太郎への譲渡を斡旋した。他にも金玉均の援助をはじめ、秘書に慶應義塾生を推薦してもらうなど、親密な交際を続けた。福沢は後藤を高く評価し、「大のひいき」と公言していた。三十年歿。○佐久間山治は慶応三（一八六七）年尾張国松名新田村（愛知県弥富市）に生まれる。父から聞いた慶應義塾三田演説館の話にあこがれ、明治十三（一八八〇）年五月慶應義塾に入学。十七年卒業後、渡米して働きながら学び、帰国後武藤家の養子となる。数社を経て二十七年鐘淵紡績株式会社に入社。一度退社するが、四

十一年に復帰して専務、大正十（一九二一）年には社長に就任する。家族的な温情主義経営で知られ、鐘紡の事業を発展させた。十三年から衆議院議員も務め、鐘紡社長（昭和五年）および政界引退（七年）後、時事新報社相談役となった。同紙の政財界腐敗追及記事から昭和九（一九三四）年三月九日、暴漢に銃撃され翌日死去した。○発信年は、自伝『私の身の上話』（武藤金太発行、昭和九年）中「後藤伯の大同団結と私」による。明治二十年にはすでに武藤家の養子となり改姓しているが、福沢は時折人名を誤って記すので、慣れた佐久間姓を書いた可能性は充分あり得る。十八年一月には渡米している。○この書簡は書幅仕立になっており、箱書には「福沢翁手簡」「素軒叟観首題」とある。「素軒」は野村素介。長州藩出身で明治維新後、元老院議官や貴族院議員を務めた。書を能くし、選書奨励会審査長・書道奨励会会頭等も務めている。

二六一五　中村道太宛書簡

明治二十二年十一月二日付

過日来毎々御尋ニ預り、御心配被成下候病人之義、一昨夜ニ掛け殆んド絶望、遂ニ昏睡ニ陥るならんと医師も大ニ心痛致居候中、其眠ハ昏睡を変して安眠と為り、昨暁ゟ熱も脈も呼吸も都て穏にして、先ツ下り坂ニ就き候有様ニ御座候。家内一同茫乎として夢の如し。死刑之宣告を受けて俄ニ放免せら〔れ〕たる者ハ、斯くもあらんかと談合居候。但し昨朝之熱ハ七度七分まで降りしものが、午後ハ少々昇り、今朝ハ八度五分にして昨朝の如くならず。是れが一時之小波瀾ニ而、別ニ事を発せざる限りハ、必ス全快と楽み居候。右御礼旁容体之大略申上度、匆々如此御座候。頓首。

十一月二日　　諭吉

中村様　梧下

尚以、家内ゟも呉々御礼申上候様申聞候。以上

【流行していた腸チフスを発症した長女中村里の病状を伝える】

［封筒表］東京日本橋区南鞘町廿七番地　中村道太様　平安［封筒裏］封　三田　福沢諭吉出

○名宛人の「中村様」は中村道太。前掲二六三書簡註。○長女里は、慶応四（一八六八）年の生まれで、はじめ三といったが、本人の希望で改名したといわれる。琴やピアノが上手で、また英語もスペリングなどは容易に覚えたという。明治十六（一八八三）年に福沢の門下生で化学者の中村貞吉（三年六月慶應義塾入学）と結婚、愛作、壮吉の二人の息子が生まれた。高橋誠一郎によれば、兄弟姉妹の中で一番よく福沢の性質を受け継ぎ、「女福沢」と呼ばれていたという。この時は九死に一生を得、昭和二十（一九四五）年に亡くなった。富田正文『福沢諭吉の漢詩35講』（福沢諭吉協会、一九九四年）参照。○京阪・山陽への家族旅行（九月十六日から十月五日まで）から帰京後、里は当時流行していた腸チフスに罹患。十七日に発症し十月三十一日から十一月一日にかけて重篤に陥ったが、一日を境に快方にむかった。この書簡では熱や脈・呼吸の状態などを告げ、昏睡状態を脱した安堵感を「死刑宣告を受けて俄ニ放免せら［れ］たる者」の気分であると表現している。このときはまた次のような漢詩も詠んでいる。世間の人々は子が多くてめでたいというが、昨晩まで談笑していた子のひどい苦しみを見なくてはいけないなんて、子のない人が羨ましいくらいである。さらにまた全快すると、医師たちの尽力による快癒を喜んで、人から何かよいことがあったのかと尋ねられたら「二二歳の子どもが生まれた」と答えようという漢詩も詠んだ。○発信年は内容および封筒消印から、明治二十二年と推定される。

二六一六　宛名未詳

発信年月日未詳

尚以、時下為人御自重専一奉存候。乍憚奥様始皆様ゟ御致意奉願。三、四月御出府之頃ハ、千紫万紅之好時節。寛々御話仕度、今ゟ相楽罷在候。以上。

【家族への伝声と、三、四月の出府を楽しみに待つ旨伝える】

○尚尚書の内容から考えて、家族ぐるみで親交のある地方名望家か。

Ⅱ　諸文集

〔旧中津市学校資金よりの海外渡航費貸与に関する覚〕

明治十七（一八八四）年三月九日

試験案文

私事今度北米桑港ニ渡り、何か職業を求度志願之処、差向旅費之用意も無之、当惑之次第。就而は旧市学校之資金中壱百弐十円銀借用致度、返済之儀ハ今壱日を期し難く候得共、彼ノ国ニ而就職成業之上ハ、身之分ニ応して元金を納る而已ならず、目下之恩を謝する為ニハ、大ニ其資本中ニ金を差加る義も可有之候也。……　……

……　……

定

一渡米ノ者ハ、英語英文吟味之上、適応ノ者ニ限る事。

一仮令適応ノ者アルモ、壱ヶ年五名ニ限る事。

一旅費之貸渡しハ、銀貨百円ニ限る事

○「旧市学校」は明治四（一八七一）年十一月に福沢諭吉の提言を受け中津に設立された洋学校。資金は旧藩主奥平家の家禄の五分の一（一〇六〇石）と、旧士族間の互助組織である天保義社からの拠出金二万円が充てられた。学則・カリキュラ

ムは原則として慶應義塾に準じ、また校長の小幡篤次郎をはじめ、主な教職員は慶應義塾から派遣された。明治十年頃までは順調に発展したが、西南戦争による経済状況の悪化や他校の成長などにより学生数が減少し、一二年には福沢をはじめ小幡篤次郎、奥平昌邁ら在京の中津出身者と猪飼麻次郎、山口広江、奥平毎次郎、島津万次郎ら中津にいる人びと計二十名で「事務委員集会」を組織し、資金の有効運用のための改革を図った。演説会の開催や士族授産のための養蚕事業の推奨などを行ったが、結局一六年一月二十四日の会合で閉校が決定した。○中津市学校は閉校が決定した時点で、まだ残余金があり、その使い道が前述事務委員集会で協議されていた。事務委員集会の議事録は一号のみの内容がわかり（原本の所在は不明）、その末尾には別冊二号に続く旨が記されている。今回の資料から閉校後も資金の使途が協議されていたことがわかる。事務委員集会は定期的に東京と中津で開催され、東京の結果を中津に知らせ、中津での会合の結果が東京に伝えられ議事が進行していく体制であった。詳しくは、西沢直子「中津市学校に関する考察」『近代日本研究』一六、慶應義塾福沢研究センター、二〇〇〇年。○この資料は元は額装されており、裏面に飯田三治による次のような説明文が貼られていた。

　此記事二枚は、明治十七年三月九日、中津市校東京委員会を福沢先生宅にて開かれたる時、中津生徒中にて海外への旅行費貸与の件を協議せられ、其際先生か記草されたる先生の真蹟なり。当時集会に列席せる飯田平作記す。

飯田家は福沢と縁戚関係にある中津藩士で、平作は明治三年十二月慶應義塾に入学。のち慶應義塾出版社に入り、『民間雑誌』などの発行に携わった。一九年より三田豊岡町で養鶏を始め、成功をおさめた。

（西沢直子）